



The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.40 / Autumn 2018

会 長 加藤 重広

事務局 〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町 1

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文科 小山哲春 研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行 ○九九支店 当座預金 店番号 099 口座番号 0130378 日本語用論学会

《PSJの20年を振り返って》 言語研究の中核としての語用論

澤田 治美 (関西外国語大学)

1. 日本語用論学会の創立—初代会長小泉保先生のこと

関西外国語大学の同僚であった故小泉保先生から、「語用論学会を設立しようと思うのですが、手伝ってくれませんか」というお話があったのは、1997年の6月のことだった。先生は『言外の言語学—日本語用論—』(1990、三省堂)を出版され、日本における語用論の発展の必要性を痛感しておられた時であった。

その後、京都駅近くのレストランで、山梨正明先生、林宅男先生、林礼子先生、故高原脩先生をはじめとする有志が参集して、お酒を酌み交わしつつ、語用論学会のイメージや各自の専門分野などを話し合い、談論風発、とても楽しい会になった。あの時の小泉先生の楽しそうな笑顔が今でも浮かんでくる。

記念すべき第1回大会は、翌年の1998年12月5日(土)、関西外国語大学で開催された。あいにくの小雨にもかかわらず、参加者は180人以上にのぼり、語用論に対する関心の高さがうかがえる大会となった。小泉先生は「川柳の語用論」と題して、記念講演をなされた。川柳を語用論の観点から分析するという独創的なも

ので、聴衆はみな深い感銘を受けた。言葉に関する小泉先生の関心がいかに広く深いものであったかがわかったからである。

小泉先生には学会発足から8年間会長を務めていただいた。その後、私は、2代目の会長を務めさせていただいた。日本語用論学会の『設立趣意書』の中で、先生は「発話の意味は、その発話の場面を考慮に入れない限り、解釈不可能になるケースが数多くあります。いや、発話をその状況において意味分析してこそ「生きたことば」の実相を明らかにすることができるのです。」と述べておられる。私たちは小泉先生から「人生の学としての言語学」を学ぶことができた。

中国語用論学会から招待されて、中国の蘇州大学で開かれた第7回中国語用論シンポジウムに参加したことも忘れがたい。小泉先生、余維先生(関西外国語大学)、私とで2001年8月6日から10日まで蘇州に滞在した(「蘇州」とはあの「蘇州夜曲」の「蘇州」である)。あの時、小泉先生は「ジョークの語用論」と題して基調講演をされ、中国の学者たちに大きな感銘を与えられた。先生のお人柄と学問が中国の語用論学会の何自然会長の心を捉え、何会長は2007年に関西外国語大学で開かれた日本語用論学会10周年記念大会で基調講演をしてくださった。これも小泉先生のおかげである。

2. 原点回帰—生成意味論と時枝言語学のこと

2.1. 生成意味論

現代言語学の歴史において、言語を研究する際に言語外の条件（もしくは要因）を研究することが不可欠であるという立場は、1960年代から1970年代のはじめにかけて隆盛を極めた生成意味論（generative semantics）のそれであった。J. R. Ross, R. Lakoff, G. Lakoff, J. D. McCawley, P. Postal, C. Fillmore などをはじめとするすぐれた言語学者による斬新な論文が数多く発表された。生成意味論は、コンテキストを捨象して言語の形式的特性を重視し、統語論の自律性を遵守するチョムスキー流の研究パラダイムに対する「反旗」でもあった。生成意味論の精神によれば、言語形式は、前提、言語行為、（発話および社会状況を含む）場面（＝コンテキスト）、主体性、主観性、さらには、会話の目的、話題、ポライトネスなどを直接に反映したものである。

生成意味論を唱えた言語学者の一人、R. Lakoff は、女性語研究のパイオニアとされる『言語と女性の地位』（*Language and Woman's Place*）の論評付き拡大版(2004)（初版は1975年に出版）の中で、自分がかつて書いたこの本に、出版から約30年たった2004年の時点で、以下のような「注釈」を付け加えている。すなわち、「言語形式の選択の仕方は、話し手自身とは誰か（何者か）、聞き手は誰か、話し手・聞き手はどこにいるのか、話し手・聞き手は何を達成したいのか、話し手・聞き手は何について話しているのか、といったことに基づいている」という。そして、この考えは、生成意味論の暗黙の想定であるとしている（R. Lakoff (2004: 104)）。筆者には、すべての生き物が環境を抜きにしては生きられないように、言語もコンテキストを抜きにしては成立し得ないと思われる。生成意味論の想定は極めてまっとうな精神を表していると言えよう。^{注1}

2.2. 時枝言語学

時枝は、言語成立の外的な条件として、次の3つを挙げた（時枝(1973¹⁸: 166; 2007: 57)）。

1. 言語主体（＝話し手）
2. 場面（聞き手、およびその他）
3. 素材

まず、「言語主体」とは、表現あるいは理解行為の主体であり、これがなければ言語行為は成立しえない。すなわち、言語主体は「言語成立の一切の根源であつて、言語は、主体によって性格づけられる」（時枝(1973¹⁸: 163)）とされる。

次に、「場面」について、時枝は、以下のよう述べている。

… 場面は、話手に対立して、表現が向けられる当の相手を焦点として、その周囲に広げられた情景、環境であつて、それは、話手と、ある志向関係において結ばれてゐる。言語表現は、常に何等かの場面において成立するものであり、場面は表現の下地であるといつてよい。表現と場面との間には、機能的関係が存在する。即ち、言語表現は、場面に制約されると同時に、また場面をも制約し、これを変化させる。場面を変化させるといふことは、主体と相手との関係を変化させることである。

（時枝(1973¹⁸: 163-164)）

最後に、「素材」とは、「主体によって語られる一切の事物事柄である」（時枝(1973¹⁸: 165)）。時枝は、主体、場面、素材の関係について、有名な次の図を提示している。

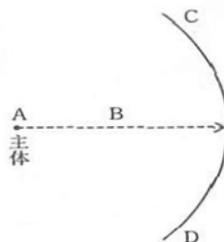


図1：場面对する主体の志向性

CDは「事物情景」であり、客体的世界に属している。Bは、この客体的世界CDに対する主体Aの志向作用を表している。上述したように、場面の最も具体的なものは聞き手であるとされるが、主体Aにとっての場面は、BとCDとが融合したものである。それゆえ、時枝によれば、場面は、純客体的世界でもなく、また、純主体的な志向作用でもなく、主客の融合した世界である。

時枝の言う「場面」は、物理的かつ心理的な「場」である。すると、主体の志向作用には、主体の心的態度以外にも、視点、立場、モダリティ、ダイクシス、前提、推意（もしくは、含み）、言語行為（もしくは、発話行為）、ポライトネスなども関係し得る。さらに、志向対象には、発話場面以外にも、談話、社会、文化、歴史、教育、ビジネス、家庭などの、より広いコンテキスト（もしくは、「場」）も含まれ得るのではなかろうか。このような要因が言語表

現の成立にとって重要な位置を占めていることは、疑いようのない事実である。

3. 言語学の中核としての語用論

現在、筆者が思い描いているテーゼは、「言語は場面によって形作られる」ということである。この意味で、語用論は、言語研究の中核であると言ってよい。語用論は、統語規則の中にさえも侵入し得る。「語用論的統語論」(pragmatic syntax)に基づくならば、統語規則も、基本的に場面の産物であることになる。例えば、WH 移動(What time does the letter say she will arrive? (手紙には彼女が何時に着くと書いてありますか?))で、なぜ、WH 要素は文頭に移動するのか? その理由は、WH 要素の情報を聞き手に問わなければならない、発話の焦点位置(主節の先頭の最も目立つ位置)に置きたいがためであろう。話し手(=言語主体)には、その手紙には彼女が何時に着くか書いてあることがあらかじめわかっている。その上で、聞き手(=場面の要素)にその時間を問うているのである。場面的要因を捨象した統語論では、その操作の動機を問うことはしない。

言語現象を場面に基づいて分析することは、語用論の重要な任務である。そして、このアプローチは、言語の意味や文法の根本問題を明らかにすることにつながるように思われる。

注

1 この書は、ジェンダーと言語の研究のパイオニアとなった古典的な書である。この中で、著者の R. Lakoff が論じていることは、女性が使うことば、および、女性に関することばは女性の無力さ(powerlessness)を表していることと主張したが、この名著は、大きな反響を巻き起こし、2004 年に、メアリー・ブチョルツ (Mary Bucholtz) 編集の下に、論評付き拡大版が出版された。

参考文献

Lakoff, Robin (2004) *Language and Woman's Place: Text and Commentaries (Revised and Expanded Edition)*. Oxford: Oxford University Press.

時枝誠記(1941)『国語学原論』岩波書店。

時枝誠記(1973¹⁸)『現代の国語学』有精堂。

時枝誠記(2007)『国語学原論』(上下)岩波書店。(澤田治美)

*** 第 21 回大会ご案内 ***

2018 年度の第 21 回大会は、以下のとおり、杏林大学井の頭キャンパスでの開催となります。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。

◆日時 12月1日(土)、2日(日)

◆場所 杏林大学井の頭キャンパス F棟
〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1

◆大会テーマ 「いまあらためて、語用論とは何か？」

◆大会参加費 会員 2,000 円、非会員 3,000 円

◆主なプログラム

≪12月1日(土)≫

10:00~11:55 ワークショップ (F 309, 310)

10:00~11:55 研究発表① (F303)

11:30~ 受付開始

12:00~14:35 研究発表② (F303, 309, 310, 311)

14:35~15:35 ポスター発表 (F棟3階ロビー)

14:00~15:35 語用論茶寮 (F棟2階国際交流プラザ奥の「中国語サロン」)

15:45~16:05 会員総会 (F309)

16:10~17:40 招待講演 (F309)

伝達意図とアドレス性(仮題)

17:50~ 懇親会 (F棟1階食堂、参加費:一般4,000円、学生3,000円を大会当日、受付にてお支払いください。)

≪12月2日(日)≫

09:20~ 受付開始

09:50~11:45 研究発表③ (F303, 309, 310, 311)

11:10~12:45 語用論茶寮 (F棟2階国際交流プラザ奥の「中国語サロン」)

11:45~12:45 昼食休憩

12:45~17:00 第1回語用論グランプリ! (F309)

12:45~14:15 ファースト・ステージグループ A
※詳細は次ページ参照

14:20~15:50 ファースト・ステージグループ B

15:55~17:00 ファイナル・ステージ、表彰

17:00~17:10 閉会のあいさつ

◆第1回 語用論グランプリ!

日本語用論学会第21回全国大会では、学会の新しい第一歩として、「第1回語用論グランプリ!」を開催します。ここでは、語用論グランプリ!の趣旨と企画内容をご説明いたします。

まず、語用論グランプリ!の狙いは、語用論に関わる多数の先生方にご登場いただき、ご自身の研究や理論分野の楽しさ、すばらしさ、語用論とのつながりなどを紹介してもらうことで

す。それを会員や潜在的な会員の方にアピールできるように、「グランプリ」形式を用いました。日時は12月2日(日)12:45より行います。

今回ご登壇いただく6名の語用論および語用論関連分野の先生方は以下の通りです。

<ファースト・ステージグループA>



大堀壽夫先生(慶應義塾大学)
認知言語学



椎名美智先生(法政大学)
歴史語用論/ポライトネス



西阪仰先生(千葉大学)
会話分析

<ファースト・ステージグループB>



井上逸兵先生(慶應義塾大学)
社会言語学



西田光一先生(山口県立大学)
新グライス派



松井智子先生(東京学芸大学)
関連性理論

まず、ファースト・ステージグループAとして3名にご自分の研究や理論を紹介していただきます。その際、3名で共通に検討できるお題ひとつ(文脈、発話行為、推論、話者の意図、ダイクシスなど)について言及いただきます。最後に、3名の中でもっとも自分の理論や語用論に対して「情熱」を感じられた方といった基準で、フロアの投票で一番得票数の高かった人を1名選出します(計1時間半)。

その後ファースト・ステージグループBを同様の方法で行います。ファースト・ステージグループのAとBから、それぞれ1名ずつ計2名がファイナル・ステージに進みます。

ファイナル・ステージでは、ファースト・ステージと似た形式で、ご自身の分野について簡単にお話いただき、互いに質疑等を交えながら(文脈、発話行為、推論、話者の意図、ダイクシスなどといった)語用論的概念についてお話を聞き、ファースト・ステージと同じ方法で優

勝者、準優勝者を決定します。

ただ、グランプリの枠組みはひとつの遊びの仕組みに過ぎず、語用論および語用論関連分野の先生方の研究手法、理論およびそれぞれの理論と語用論の関連についてお伺いするのが第一の目的です。オーディエンスの応援も重要な要素になりますのでぜひふるってご参加ください(なお、第2回があるかどうかは定かではありません)。(鍋島弘治朗)

◆「語用論茶寮」について

交流の場としての大会という趣旨をあらためてふまえ、語用論研究にまつわる肩のこらないよろず相談の「サロン」を置いてみることにしました。

大会の発表に関すること(通る要旨の書き方!?)、S/Pへの論文投稿に関すること(アクセプトされる論文とは!?)、理論の動向や研究の進め方に関すること(方向性のオルタナティブ?)、等々、まあお茶でも飲みながら話しましょうということで、お気軽に立ち寄っていただければと思います。

今回の「茶寮」は試行的な企画として、大会両日とも、昼前後または午後1時間半ほどの営業予定です。それぞれ3~4人の「話し相手」を立てることを考えています。「話し相手」のラインナップなど詳細は追ってお知らせします。

では、井の頭の「語用論茶寮」でお待ちしています!(滝浦真人)

◆プログラム・要旨集の紙媒体廃止について

今回大会より、プログラム・要旨集の紙媒体の配布を廃止することとなりました。代わって学会公式ホームページ上に電子媒体(PDF)にてプログラム・要旨集を、11月20日前後に公開する予定です。大会にご参加の皆様はノートPCをご持参になるか、予め紙に印字してご持参いただくか、いずれかの方法にてご利用ください。

◆「発表会場に現れない、もしくは、ポスターを貼ってあるだけで説明員がまったくいない」などのいわゆる「No Show」に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会運営委員会に無断で発表を行わない、もしくはポスターの掲示のみで説明を行わない場合に、これらを「No Show」とみなし、本学会のホームページにて公表します。ただし、事前もしくは当日に、また、やむをえない場合には事後に、発表を行えなかった合理的な事情の説明があった場合には、「キャンセルされた発表」と

研究会コーナー

◆関東地区研究会

関東地区では以下のように講演会を企画しております。ふるってご参加ください。

日本語用論学会関東地区講演会

講師：堀田隆一氏（慶應義塾大学教授）

演題：「歴史的観点から見た語用論と統語論の
接点（仮題）」

司会：井上逸兵（慶應義塾大学）

日時：2019年1月19日（土）15:00-

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

(<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/mita.html>)

事前申込不要、参加費無料

（終了後、講師の堀田氏を囲んで懇親会を予定しております。これにつきましては、
ipinoue@ipinoue.jp（井上）までお申し込みください。）（井上逸兵）

◆中四国九州地区研究会

6月30日（土曜日）午後1時より2018年度第1回日本語用論学会九州山口地区研究会が開かれた。当日は、九州大学、伊都キャンパスで新築されたばかりのイーストゾーン1号館を会場とし、時間順に、(1) 西田光一（山口県立大学国際文化学部）“Proverbs in context as proforms of evaluative utterances,” (2) 土屋智行（九州大学大学院言語文化研究院）「構成要素数にとらわれないパターン束分析の手法の検討」、(3) 金兌妍（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程）「日韓両言語の初対面会話にみられるスピーチレベルの特徴について—スピーチレベルを定める基準、切り替え方法、普通体の生起条件に関する分析—」の3件が発表された。西田の発表は11月に開かれるAMPRA-4の発表と重なる部分があると断ったうえで、ことわざは定型的で代用形としての機能があるため、談話内で先行文脈の評価内容を受けるのに使われると提案した。土屋は、コーパスに頻出する構文の抽出は、構成要素数が多ければ多いほど抽出効率は低下することを指摘し、そのうえでパターン束分析において、構成要素数が多くても効率的に構文を抽出する手法を検討しているという研究成果を披露した。金は、大学生同士の会話をもとに、初対面場面におけるスピーチレベルについて日韓対照研究を行い、その結果、初対面の相手とのスピーチレベルを定める際に、日本人大学生では学年、韓国人大学生では年齢が重視されることを指摘した。この研究会は、参加者は10名程度と規模は大きくないが、各発表に十分な質疑応答の時

間を設けることができ、とても有益だった。また、当日は松村瑞子教授（九州大学大学院言語文化研究院）が学位論文を基に刊行した『日本語のポライトネス—異文化理解教育の方法開発に向けて—』（花書院、2018年）が紹介された。今後も若手研究者と中堅、ベテランの各層が意見交換し、研究を促進するとともに交流を深める場として地区研究会を継続していきたい。

（西田光一）

◆メタファー研究会

メタファー研究会夏の陣2018は、「比喩と創造性」をテーマに、7月28日（土）10:00~17:00、京都大学吉田南キャンパス総合人間学部棟1102教室にて約70名の参加を得て開催した。なお本会は、京都言語学コロキウム（KLC）との共催で行った。午前中は、段静宜氏（関西外国語大学（院））・寺井あすか氏（公立はこだて未来大学）の研究発表に続き、招聘発表として宮澤淳一氏（青山学院大学）に「マクルーハンとメタファー：なぜメディア論が修辞学に基づくのか」のタイトルで講演いただいた。午後の前半は京都言語学コロキウムの形式を採用し、フロアとのディスカッションの時間を長く設定したセッションを2室同時で進行し、齋藤隼人氏（国立台湾大学研究員）・小松原哲太氏（立命館大学）による研究発表が行われ、各室ともに充実した議論がなされた。最後に、「意味の創発と比喩」をテーマとしたシンポジウムでは、谷口一美（京都大学）・楠見孝氏（京都大学）・橋本敬氏（北陸先端科学技術大学院大学）がそれぞれ認知言語学、認知心理学、知識科学の立場から発表を行い、意味の創発への学際的アプローチの現状と可能性の一端を示し、フロアとも活発な議論が交わされた。

（谷口一美）

委員会より

★大会運営委員会プロシーディング担当より

日本語用論学会では、2005年度第8回大会より『大会発表論文集』を発行しておりますが、2017年度第20回大会の論文集は、本年7月に学会のホームページで公開されました。

掲載された論文数をご報告いたします。

研究発表（日本語）24本

研究発表（英語）6本

ワークショップ発表（日本語）13本

ワークショップ発表（英語）4本

ポスター発表（日本語）6本

ポスター発表（英語）3本

合計で56本が掲載されました。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。

(竹田らら)

京都市左京区下鴨南野々神町1

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部

英語英文学科 小山 哲春 研究室内

E-mail: secretary@pragmatics.gr.jp

Phone: 075-706-3670

《 事務局より 》

★ 会費納入のお願い

◆年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円でございます。11 月末までに、ご納入いただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。学会口座は以下の通りです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能でございます。

会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

psj@outreach.jp

昨年度から年会費を変更させていただきました。また三井住友銀行の口座は閉鎖させていただきました。

ご負担をお掛けいたしますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

★激甚災害被災会員の皆様の会費・大会参加費免除について

日本語用論学会では、平成30年北海道胆振東部地震、平成30年梅雨前線豪雨等(平成30年7月豪雨含む。)等の激甚災害、またはこれに準ずる災害で被災された会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2018年度会費」ならびに

「2018年度年次大会(2018年12月)の参加費」を免除させていただきます。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈りしております。免除申請先(メール、郵送、電話のいずれも可、まずはご連絡いただけましたら手続きの詳細をご連絡させていただきます。)

日本語用論学会事務局

〒606-0847

★PSJ 公式 HP リニューアルのお知らせ(再掲)

1. 新 HP への移行と電子投稿システムの運用開始

語用論学会のホームページがリニューアルされましたので、どうぞご活用ください。

<http://www.pragmatics.gr.jp/> (URL は変更なし)

新しい機能として、会員専用ページから学会誌『語用論研究』への論文投稿ができるようになりました。また、会員専用ページから大会発表応募や参加申込みもできます。年会費のカード払いも以前同様可能です。

2. 会員専用ページへのログイン方法

新 HP の会員専用ページは、セキュリティ強化のため二段階認証になっています。ログインは以下の通りにユーザ名/ログイン名、およびパスワードを入力して行ってください(すべて半角小文字)

第一段階認証：

ユーザ名(user)：basic

パスワード(password)：psj

第二段階認証(マイページログイン画面)

ログイン名：学会にご登録のメールアドレス

パスワード：以前通知してあるもの

パスワードを忘れた場合は、「パスワード忘れた方」をクリックすると新しいパスワードが登録されたアドレスに送信されます。マイページ(会員専用ページ)で登録情報の確認・修正をお願いします。

★《新刊・近刊案内》★

■『新版 日本語語用論入門 コミュニケーション理論から見た日本語』山岡政紀・牧原功・小野正樹著、明治書院(1,600円+税)

大学で使用する語用論の教科書として定評のあった旧版からの改訂版である。語用論の基本的な考え方を概観する第1章からはじまり、第2章のグライス理論(協調の原理)から、関連性理論、発話行為論、発話機能論、ポライトネス理論といった諸理論をバランス良く、丁寧に解説してゆく。各章に配置されたタスク・練習問

題・ヒントは本書の大きな特徴であり、初学者にとっては、発話がどのような目的でなされているのかを考える良いきっかけになる。



また、とかく舶来ものの理論の紹介に終始する概説書が多いなか、三尾砂や永野賢の場面論なども紹介されているあたりは、日本語学畑出身であるという著者らならではの特徴と言えよう。そして最後は、日本語の配慮表現について

敬意、ポライトネス、慣習化、メタファーやアナロジーといった観点から論じる第7章で締めくくられている。旧版では、日本語の配慮表現に関する最新の研究成果が第二部として第7～13章まで配置されていたため、専門書としての側面もあったが、日本語の配慮表現に関する研究がこの10年で一気に進み、研究が多様化したのを受けて、本書では配慮表現の全体を統括する枠組みを示すことに注力し、1つの章にまとめられた。そのため、よりいっそう教科書としての色彩が鮮やかに浮かび上がっている本書であるが、そのことは、旧版ではサブタイトルであった「日本語用論入門」が本書のメインタイトルになっていることから伺える。また、価格が1,600円へと引き下げられたことも、教科書としての採用を考える際に、地味に嬉しいポイントである。(2018.8.13刊)

■『「視点」の違いから見る日英語の表現と文化の比較』尾野治彦著、開拓社(2,160円+税)



「視点の違いから見る」とタイトルにあるように、認知言語学と親和性のある分析が多く提示されている本書であるが、広い意味で語用論に連なる概念・事例も随所に見られる。例えば第3章は、著者が2007年に本学会で発表した内容に基づいたも

のであり、「いま・ここ」を認識の原点とする時や事象の推移に関する表現について論じている。絵本の日英比較を通して明らかになった日本語の「紙芝居的手法」は、コミュニケーション論や文化論的な観点からも新鮮な指摘である。第2章では、視覚体験に基づいた「見(る)」や「顔」に関する表現を取り上げている。日本語では「笑顔を見せる」「知らん顔をする」「したり顔で」「得意顔で」のような表現が多いが、英語では“face”を用いずに“smile”や“pay no attention”のように動詞で訳される。しばしば、日本語はコト志向で、英語はモノ志向の言語だと言われるが、少なくともこの場合はそれが逆転するため、非常に興味深い。第6章では日米の映画ポスターを比較・分析しながら事態把握の違いについて論じており、これも本書の大きな魅力の一つになっているが、全ての章にわたって日英語比較に有益な先行研究の文献が豊富に引用されているため、日英語に関する教養を幅広く学びたい人や、これから研究を始める若い大学院生にとっても有益な書となっている。(2018.6.20刊)

■シリーズ フィールドインタラクション分析

1『多職種チームで展示をつくる 日本科学未来館『アナグラのうた』ができるまで』高梨克也編(編)高梨克也、平本毅、小澤淳、島田卓也、田村大(著)ひつじ書房(定価3,200円+税)



フィールドインタラクション分析と銘打ったシリーズの第1巻である本書は、一言で言えば、ここに存在しないものを、多人数で作りに上げて行く過程を分析する、というものである。日本科学未来館の常設展示『アナグラのうた～消えた博士と残

された装置』ができるまでを追ったこの1冊は、筆者の強い思いが詰まっており、ドキュメンタリーものを読んでいるような錯覚(錯覚ではなくまさしくドキュメンタリーなのだが)に襲われる。

冒頭で筆者は、この制作過程の特徴を「まだ存在していないものに対して多職種チームの誰かが(潜在的な)問題に「気づき」、それを「共有し」ていくこと」と述べている。それは日常

世界にもよくあることで、私たちのコミュニケーションの根幹の一つでもあるだろう。本書ではそれを、既存の分野に寄らず、言語学、身体コミュニケーション研究、民俗学、文化人類学、マクロ社会学、芸能学、博物館展示学といった、さまざまな分野から総合的かつ横断的に研究し一つの答えを示して行く。

本書の中にはふんだんに図式が挿入されており、理解を手助けしている。その分、文章の方は初心者には多少難解さが残るかも知れないとも感じる。その場合は同じ高梨氏の『基礎からわかる会話コミュニケーションの分析法』を読んでからこちらに取り掛かるのが良いだろう。

本書には幾つかのコラムと Tips が散りばめられている。例えば、ビデオ撮影のテクニック、トランスクリプトについてなどはこれから自分でデータ収集を行おうと計画している研究者には非常に有用である。(2018.8.20 刊)

■広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思っておりますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■この夏は日本列島が多くの災害に襲われました。被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。様々なことに忙殺され余裕のない日々を送っておりましたら、先日ふと金木犀の良い香りが漂って来て、いつの間にか秋になっていたことに気がつきました。もう少し余裕のある人生を送りたいものです。(秦かおり)

■委員の仕事をしていると、電子メールの発明のおかげで、我々の仕事が飛躍的に便利になったことを痛感します。あ、「我々」なんて言うてはいけませんね。「原稿を依頼・催促する側」です。実際には自分も「原稿を催促される側になることもある」ので、~~μ~~切直前には、その不便さも「痛」感します。(尾谷昌則)

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第 40 号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2018 年 11 月 6 日

[広報委員会]

\* 委員長：尾谷昌則

\* Newsletter 編集担当：

秦かおり (hata@lang.osaka-u.ac.jp)

\* 公式ホームページ担当：尾谷昌則

\* 会員メーリングリスト担当：金丸敏幸